
ニヒルな僕ら

貴宮忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニヒルな僕ら

【コード】

N0976BA

【作者名】

貴宮忍

【あらすじ】

できるなら狂ってしまいたいよ

朝目が覚めると、何故僕はまだ生きてるんだろうつて思う。

一生夢を見続けていられたら、どんなに楽だろう。

僕だけの、僕による虚構の世界で、一生暮らせたら……。

つぎはぎだらけの虚構の世界で冒険をし、酒を飲み、女を抱き、結婚する。

ある時僕は剣士で、そこはモンスターが生息するファンタジーの世界。

ファンタジーの次は、リアルな現代の格闘家。

その次は資産家、次の次は弁護士、次の次の次は……。

なんて目が覚めてから毎日考えている。

こんな世界に僕の居場所はないんだと感じる。

居場所は作るものだという奴がいる。

確かにそうだと思う。

だが、自ら作った居場所が楽しいものでなかったら？

どんな集団の中に居場所を作ったとしても、居心地が悪かったら？

いや、そもそも楽しくない自分の居場所なんて、居心地の悪い自分の

居場所なんて、世間の言う自分の居場所ではないのかもしれない。

僕はそれなりに上手く学校や家族の人たちと交わり、それなりの関係

を築いていた。

だから僕はいつだって、学校や家族の中に溶け込むことができるし、

みんなと上手くやれる。

バカ騒ぎだってできる。

それは世間の言う自分の居場所って奴じゃないんだろつか？

もしそれが、みんなの言う自分の居場所って奴なのだとしたら、僕はもうだめかもしれない。僕はもう、そんな居場所にはうんざりしていたし、所詮上辺だけの付き合いに疲れていた。

なによりそこにいて楽しいと、居心地がいいと思えたことはなかった。

世間の人間が楽しいと思えることが楽しいと思えなかったら、僕はどう生きるべきなのだろう。

殺人や強姦、ドラッグなんかに手を染めて、一時の快樂を得るぐらいしか思いつかないが、僕も正常な人間だ。

さすがに犯罪にまで手を染めようとは思わないし、刑務所で暮らすなんてごめんだ。

社会に出れば、低俗な風俗や娯楽と、週末の酒飲みのために働かなくてはならない。

ただ生きるために、毎日同じ時間に起きて、同じ時間に家を出て、同じ景色を見て同じ会社に勤めるなんて…できる気がしない。

そんな日々が40年近く続くなら、早いうちに死んでしまった方が楽そうだ。

だから社会に出るまでのモラトリアムが1年を切った僕は、どうしようもなく死にたかった。

ある時自暴自棄になっていた僕は、どうせ死ぬのだし、何をやっても構わないと思っていた。

とはいえ、ちよつとアクティブな自分になっただけで具体的になにをするわけでもなかった。

特に確認したいサイトがあるわけでもないのに、携帯をいじり、ネットを回る。

SNSを見ていたとき、ふつと閃いてた。

僕はSNSの一言書き込める所に

「1ヶ月後に自殺しようと思います。誰か見届けてくれませんか？」

と書き込んだ。

今思えば自暴自棄故の行動だと恥ずかしく思う。学校の友人100人近くがこれを見ただろう。

馬鹿みたいにおちやらけていた自分が、リストラされたサラリーマンみたいな事を言いだし、きつとみんな驚くだろうなと思い、気づけば夢の中にいた。

目を覚ますと、携帯に何通かのメールが着ていた。

迷惑メールだろうなと思い、そろそろアドレスの替えどきかな、なんてつぶやきながら受信ボックスを開けた。

すると、何があったの?とか、死んじゃいけないとか、そんなメールが着ていて、ああ、そういえばSNSに変なことを書き込んだなと思い出した。

着ていたメールを全部見てみると、やっぱりありきたりな内容しかなかった。

こいつらは人生楽しいんだろうなと理由もなく思ったが、ただの羨望でしかない。

すると、携帯が振動し、メール受信中表示された。

メールを開いてみるとこう書いてあった

「君の死ぬ瞬間を見てあげるよ」

メールの差出人は、僕がそこまで仲良くなかった人だった。

けれど、その人のことはよく知っていた。

同じ学校の美少女で、学業優秀スポーツ万能。

いつ彼女とアドレスを交換したのかまったく覚えがなかったのだけれど、僕はそのメールにだけ返信して、また夢の世界に飛び立った。

正直に言えば、惚れていた。

同じ高校で、美少女五本指に入る彼女は、男子の憧れで、僕もそんな男子の1人だった。

そんな彼女と手を繋ぎながらデートしている自分。

なんとなく現実感のない脆い世界で、僕は彼女と一緒にいた。

高校を卒業して疎遠だった彼女といちゃついてるだなんて…有り得ない。そうだ、有り得ない。

だからこれは夢なんだろうな。

しかし、夢とは言え好きだった彼女とデートできるのは、嬉しいなんてものじゃない。

僕と彼女は、岬を歩いていた。

彼女は

「2人なら、できるよ。」

1人でできなくても。と言って僕の手を取った。

そして僕らは、手を繋いだまま、岬から何十メートル下の海に飛び込んだ。

今なら集団自殺した連中の気持ちもわかる気がする。

1人じゃ怖くとも、2人なら安心だ。

1人が怖くなっても、2人なら後戻りできない。お互いが気遣うから、1人の恐怖は打ち消される。

僕は、2人が飛び込んだ岬を見ていた。

僕が、飛び込んだ僕を見ていた。

なんだか不思議な感じた。

だから僕は、これは夢なんだと思った。

翌日僕は彼女と会うことになった。

かなり唐突に思えたけれど、一ヶ月後に死ぬことを考えたら早いことに越したことはない。

待ち合わせ場所に着くと、まだ彼女は着いていないようだった。

少しどきどきした。

同時に不安だった。

何を思っただけで彼女は僕の死につき合おうと思っただろう。

実は僕のが好きだったとか、そんなのは有り得ないだろうけど、冷やかしかもしれないという不安は拭えない。

まあそんなことは彼女が来たら聞けばいいことだろう。

しかし、なんだって待ち合わせ場所が新小岩駅の快速ホームなんだろうか…。

そりゃ今では自殺の名所と化しているけれど、なかなかベタじゃないだろうか。

呼び出しておいて来ないとかあり得るかもしれない。

不安になりながら顔をあげると、少し先に彼女がたっていた。

どうしよう…緊張する。

いつかの夢のように、仲良く会話できたら良いけれど、なんだかキョドリそうだ。

「久しぶり」

彼女が僕の近くまできて言った。

「お、おう」

なんとか声を振り絞る。「確か…卒業以来だよな？卒業式の日に軽く喋った気がする。」

「うん。お互い何処の大学に行くのか話したんだっただかな」

「そうだね。それにしても、なんだってSNSにあんなことを書いたの？」

「なんでと言われてもねえ。それを言ったら君は何故あんなメールを？」

「何故も何も、私は君が死ぬ所を見届けてほしいって言うから、見てあげようと思っただけ」

「君とはあまり喋ったことなかったけれど、随分と変な趣味をしているんだね」

と僕が言つと、彼女は下を向いたまま黙ってしまった。

それから数分ぐらい、2人で黙って電車をみていた。

「しかし、何故新小岩なんだ？」

沈黙に耐えられなくなった僕は、隣でぼうつとしている彼女に尋ねた。

「最近自殺が多いからかな。ここで電車を見ていたら、誰かがはねられる所を見れるかもよ？」

「人が死ぬ所を見たいのか？」

「見たいわ。だから今ここにいるの。今日は解散でいいかしら？」

「特にやることもないし、別にいいが…」

「じゃあね。またメールするから」

そう言っただけ、彼女は、タイミングよく来た電車に乗って姿を消した。

それから僕は、終電までホームの椅子に腰掛けて電車を見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0976ba/>

ニヒルな僕ら

2012年1月10日02時48分発行